アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所　羅田　享

今回扱うアニメ作品：天気の子

あらすじ

家出した高校生の森嶋帆高は、雨が降り続く東京で孤独を抱えながら生きていた。定職も住む場所もないまま都会の片隅をさまよう彼は、フェリー乗船中に命の危機に瀕したところを須賀圭介に救われる。偶然の出会いから、帆高は須賀のオカルト雑誌編集プロダクションでアルバイトを始め、少しずつ東京での生活基盤を築いていく。

ある日の取材中、帆高は繁華街で風俗のアルバイトに勧誘されていた少女・天野陽菜を助ける。危機一髪の逃走劇の後、陽菜は廃ビルの屋上で不思議な祈りを捧げ、局所的に雨を止める能力を見せる。彼女は「晴れ女」と呼ばれる特別な力の持ち主だったのである。

陽菜は母親を亡くし、弟の凪と二人で必死に生きていた。帆高と出会ったことをきっかけに、二人は「晴れ女」のビジネスを始め、雨に悩む人々の願いを叶えるサービスを展開する。しかし、晴れを呼ぶたびに陽菜の体は少しずつ透明になっていく。

物語が展開するにつれ、帆高と陽菜の心の成長過程が描かれている。孤独と喪失感を抱えた二人は、互いの存在によって初めて心の拠り所を見出していく。陽菜は帆高との出会いで「晴れ女」という役割以外の自分自身の価値を知り、帆高は陽菜を守るために自分の弱さと向き合い、強くなっていく。

そして二人は互いを必要とし、支え合うことで、困難な運命に立ち向かう勇気と未来への希望を育んでいく。この物語は、現代を生きる若者たちの孤独と葛藤、そして希望を美しい映像と繊細な心理描写で描き出した作品である。

今回のテーマ

空想と反逆とエディプスコンプレックス

はじめに

この作品が描くのは、喪失感と社会への違和感を抱え、どこか現実から切り離されたような若者たちの姿である。主人公の森嶋帆高をはじめ、周囲の人々は皆、喪失が受け入れられず、彼らの心は空想と現実の中で揺れ動き、孤独を感じ、社会に馴染めないでいる。帆高が愛読書として持ち歩く「キャッチャー・イン・ザ・ライ（ライ麦畑で捕まえて）」は、そんな彼らの心の象徴とも言える。主人公ホールデン・コールフィールドが、大人たちの偽善や社会の不条理に絶望し、純粋な子供たちを守りたいと願う姿は、帆高たちの心の内を映し出している様に感じられる。

特に、帆高が警官隊を振り切り、自分の信念を貫こうとするシーンは印象的である。これは単なる逃避ではなく、社会の既成概念に縛られずに、自分自身の道を切り開こうとする若者たちの強い意志の表れである。この行動は、新海誠の前作「君の名は。」で、主人公たちが町内放送局をジャックし、変電所を爆発させたシーンとも共通する。どちらも、既存の秩序に反抗し、自分たちの声で社会を変えようとする若者たちの姿を描いている。

このような若者たちの行動は、精神分析的な観点から見ると、エディプス・コンプレックスとも関連があると言える。彼らは、社会という巨大な父親像に反抗し、自己のアイデンティティを確立しようとしているのかもしれない。

現代社会は、高度な情報化が進み、人々は様々なものに囲まれている。しかし、その一方で、若者たちは、コンプライアンス（規範・ルール）や効率性を重視する社会の中で、自分の個性を表現する場を失いつつある。この作品は、そんな閉塞感の中で生きる若者たちの叫びであり、同時に、自分たちの力で未来を切り開こうとする彼らの希望でもあるように感じられる。

その様な思いで、この作品を解説していければと思う。

今回のテーマ

Ⅰ．空想と現実の狭間で生きる登場人物

Ⅱ．「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く

Ⅲ．警察官とエディプスコンプレックス

Ⅰ．空想と現実の狭間で生きる登場人物

はじめにでも述べたが、主人公である森嶋帆高を取り巻く登場人物は何かしら、心の傷を抱えており、空想と現実の狭間で生きている様に感じられる。主人公をはじめ、その一人一人について考察していきたい。

森島帆高（もりしまほだか）：アニメ上では純粋でまっすぐな性格に映るが、高校在学中に身寄りがいない東京に家出をしたところに、彼自身色々な葛藤を抱えていたことが窺われる。家出の詳細は不明。しかし陽菜を風俗バイトに勧誘した男性とトラブルになり、帆高は馬乗りにされてその男性に殴られるシーンがあったが、それは彼の人生に於ける反復強迫的な側面を暗示している様にも感じられる。この出来事が、帆高を家出へと駆り立てた心の動きを推察させる。それは、父親像に反抗しようとするも叶わず、打ちのめされてしまうという、エディプス・コンプレックスに関わる内的葛藤の投影とも考えられる。それであるが故に帆高は初めて陽菜の家に行った時に「なんだか、息苦しくて、地元も、家族も」と言ったのだろう。彼の愛読書であるサリンジャーの「キャッチャー・イン・ザ・ライ」は、そうした帆高の心の内を象徴しているように感じられる。
→自身の抱くエディプスコンプレックスを否認し、大人という助けなしでも、自分は独力で社会で生きていけるという万能空想を抱くも現実は社会の中に入っていけず（東京の生活に入れず)、ホームレスに近い状態になってしまう。

天野陽菜（あまのひな）：母の入院の面会中に何かに誘（いざな）われるかのように廃ビルの屋上に向かい、鎮座している小さな鳥居を潜ったところ、祈りによって局地的に晴れにさせる力を持つ。そのことが彼女の万能空想を象徴している様に感じられる。

その後、彼女の母は亡くなり、弟の凪と二人になるが、誰にも迷惑をかけず、いつまで

も大人という助けなしで、この二人で一緒に生き続けようという空想を抱いているように感じられる。それは陽菜自身が自分を犠牲にして、ある種失った母と陽菜自身が同一化することで家族を守ろうとしているように感じられる。陽菜の家が非常に生活感にあふれているのは印象的である。それは、陽菜自身の母の喪失への否認である。
→帆高と陽菜はそういう共通点があったから、陽菜は帆高にシンパシーを感じ、ビックマックをおごったのだろう。
　しかし現実は叶わず、マクドナルドで年齢を詐称して働くも発覚して解雇されてしまい、風俗バイトをしようとするも頓挫。児童相談所が介入することになる。陽菜は常に明るく振る舞っているが、その姿がどことなく痛々しい。母の喪失を受け入れられず、孤独と不安感を常に抱いているように感じられる。

天野凪（あまのなぎ）：陽菜の弟で小学５年生。思春期入り始めの年代であり、恋愛経験も豊富で、アニメでもアヤネとカナと二人の女の子と同時につきあっている。大人びた発言が多く、帆高からも「センパイ」と言わしめるほど。誰にでも分け隔てなく付き合うことのできる性格である。しかしそこには、自分の姉、陽菜に迷惑をかけないように自分を押し殺して、相手に合わせるように生きている様にも感じられる。

須賀圭介（すがけいすけ）：オカルト雑誌『ムー』の記事の寄稿を生業としている。しかし実際は現実主義者で迷信には否定的である。家出して上京し、間宮明日花と大恋愛ののちに結婚し、娘をもうけるが、程なくし、妻を亡くす。娘を溺愛しているが、義母が養育権者となり、会わせることを渋られている。彼の事務所兼自宅は古びたスナックを改装しており、なにかしがない仕事を細々とやっている様に感じられる。そこには妻の死という喪失が受け入れられず、娘にもなかなか会えない状況で自堕落な生活になっている一方で、娘に会いたいという思いでどうにか踏みとどまっている様に感じられる。
　『ムー』が扱う超常現象や宇宙の謎は、彼にとって、現実世界では得られない神秘や空想の世界である。しかし、それは同時に、現実から目をそらすための**投影**でもある。彼は、現実主義な一方で、オカルトの世界の中に、失われた妻や娘の姿を重ねているのかもしれない。

須賀夏美（すがなつみ）：須賀圭介の姪で、大学４年生。同級生が内定を続々と獲得する中、就職活動には消極的で、アルバイトと圭介の事務所での居候を繰り返す自由な生活を

送っている。小説版では、社会への適応を拒むかのような態度で、占いや迷信に深くのめり込むなど、子供のような一面と大人への不安が入り混じった複雑な心の内があるように感じられる。

→帆高が上京して出会った人々は、この様に空想と現実の狭間で葛藤を抱えながら生きている。帆高と交流する中で、彼自身にも、そして彼らにも徐々に心の変化が起きていく。

Ⅱ.「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く

1）「ハレ」と「ケ」

「ハレ」と「ケ」とは、柳田國男によって見出された、日本人の伝統的な世界観のひとつ。

- **ハレ:** 特別な日、儀礼、年中行事など、日常から離れた非日常的な時間や空間を表す。例：結婚式、お祭り、正月など。
- **ケ:** 日常生活、普段通りの時間や空間を表す。　例：仕事、家事、私たちが日々を送る中で経験する出来事。

日本では、戦後から高度経済を経て、大衆消費社会になったことで、派手な物、美味しい物が手軽に消費出来るようになり、ハレとケの区別が曖昧になった（どちらかと言えばハレが続いている状態になった）と言われている。

一方で、ある意味、現代社会を描いている「天気の子」では雨の日がずっと続いており、非日常的な空間などなく、常に同じ日々が繰り返されている。雨は登場人物にとって息苦しさ、孤独感、閉塞感を象徴している。

帆高も陽菜もそんな鬱積とした世界から抜け出したいと必死にもがいている。そしてこのことこそが、コロナ禍から今に続く、若者達の生きづらさを表しているようにも感じられる。

2）帆高の「ケ」

先の登場人物紹介でも上げたが、帆高は高校生にも関わらず、鬱積した世界から抜け出

そうと、自身が暮らす島を離れ、東京という新天地で心機一転、社会と関わろうとした。しかし現実は厳しく、なかなか仕事が見つからず、ホームレスに近い状態になり、雑踏な都会の海に飲み込まれそうになる。やむを得ず、東京行きのフェリーで出会った須賀圭介に世話になる。（フェリーで甲板から海に落とされそうなところを圭介に助けてもらうシーンは、帆高の東京での生活の暗示の様にも感じられる。）

帆高は須賀の仕事の手伝いをしながら、須賀、夏美との共同生活が始まる。そのシーンでは帆高は日々の活動に追われ、時に須賀に仕事で叱られながらもイキイキとした様に描かれている。小説版では次の様に書かれている。「僕はまた理解する。どんなに叱られてもちっとも辛くない理由。僕が変化したわけじゃない。相手がこのひと達だからだ。須賀さんも夏美さんも、僕が家出少年であろうと関係ないのだ。当たり前の従業員として、当たり前に頼ってくれるのだ。僕を叱りながら、お前はもうちょっとマシになれる、彼らはそう言ってくれているのだ。（略）それが僕の体を強くしているのだ。」

ここに象徴している様に帆高は須賀達に抱えられながらも、一人の対等な存在として扱われる中で、人間らしい生き方を取り戻し、大人への階段を登っていく。

→エディプス葛藤に向き合う準備となる。

そして上京して、困窮していたときに出会った陽菜と再会する。

３）エディプス葛藤と「ハレ」

路地で帆高は偶然に陽菜を見かける。しかしそのときの彼女は大人の男性二人に説得され、路地裏のホテル内に誘い込まれそうになっている。帆高はその様子を見た時、当初戸惑うが、バッグに入った拳銃を握り締め、彼女を助けに行こうとする。

しかしその試みはうまくいかず、チンピラの様な金髪の男性が馬乗りになり、帆高は殴打されてしまう。（それがこれまで帆高が抱いているエディプス葛藤の再演が生じていると考える）帆高は当初何もできず、悔しいと思い、拳銃を彼に向け、発砲する。そこで男二人は呆然として、その隙に陽菜は帆高の手をとり、朽ちた廃ビルに逃げ込んでいく。

→拳銃は「男性」の象徴であり、殴打され続ける中で拳銃を発砲したことは、帆高がこれまでの自分とは違い、大人達に立ち向かえる力を持っているということを誇示している様にも感じられる。しかしそれは社会的に好ましくない形での誇示である。そして帆高と陽菜のやりとりがある。

陽菜：君！勝手になにするのよ！　ハンバーガーのお礼のつもり？……さっきの銃、な

に？あなたなんなの！？
帆高：あれは……拾ったんだ、オモチャだと思って――。お守り代わりに持っていただけで――。
陽菜：なによそれ！？あんなの人に向けるなんて――殺してたかもしれないじゃん！
帆高：（息を呑む）ハッ……
陽菜：信じられない！気持ち悪い！最悪！！
陽菜は吐き捨てる様にいうと大股で歩き去っていく。
帆高は拳銃を手にし、それを見つめながら手を振るわせ、拳銃を投げ捨て、うずくまってしまう。
しばらくして陽菜が戻ってくる。
陽菜：……私、バイト、クビになっちゃって。
帆高：……え？それって俺が――？
陽菜：別に君のせいじゃないけど……。 ……でもだから、稼げる仕事が必要だったの。
帆高：……ごめんっ、俺……勝手に…クッ…
帆高は涙を堪える　そこで微笑む陽菜
陽菜：ね、痛い？
帆高：え、いやっ、別に……！
微笑む陽菜
陽菜：君、家出少年でしょ？
帆高：え！
陽菜：わかるよ、そのくらい。せっかく東京に来たのに、ずっと雨だね…。　ちょっと来て！
陽菜に連れられ帆高は非常階段を登り、屋上に向かう。（略）
そこで陽菜が両手を組んで祈ると、陽菜と帆高の周りだけに光が差し込み、雨が止み、晴れていく。
帆高：晴れ女……？
微笑む陽菜
陽菜：私、陽菜。君は？
帆高：……帆高
陽菜：いくつ？
帆高：え……１６
陽菜：ふうん（上目遣いで、なにか品定めする表情で）…年下かぁ

帆高：え？
陽菜：私はねぇ、えーと、来月で１８！
帆高：え！見えねぇ！（略）
陽菜：よろしく、帆高

【考察】

帆高と陽菜が再開し、交流し、話の展開が始まっていくシーンである。陽菜は自ら進んで引き受けた風俗の仕事ではあったが、一方で引き受けたことに後悔の念も感じており、困惑していた様に感じられる。そこに帆高が体を張って止めてくれたことに感謝の念を感じている一方で、拳銃を持っている帆高にも疑心の念を抱いていたと思われる。それゆえに帆高に強い口調で問い詰めたのであろう。

そのことに加えて、ここで、「シン　エヴァンゲリヲン　劇場版」のシンジとゲンドウが対峙するシーンで「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」とゲンドウが告げたシーンを彷彿とさせる。そこにおいて、彼が告げた意味は、現実的に父を倒すことではなく、自身の内的な父親像を乗り越え、現実で父的な存在に恐怖を抱かず、お互いを深く理解し、認め合い、対等な存在でいられることと、このシンエヴァを扱ったときは述べたが、陽菜の帆高への思いはゲンドウと同じ思いがある様に感じる。

帆高が拳銃を所持しているという事実は、彼の内面の不安定さや、周囲に対する攻撃性を象徴していると考えられる。それは、エディプス葛藤において、父親に対する抑圧された感情が暴力的な形で現れる可能性を示唆している。陽菜が帆高をなじったのは帆高にそういう大人になってほしくない（そういう形でエディプス葛藤を解決しないで欲しい）。という陽菜の思いが込められている様に感じられる。

そこで、帆高が拳銃を投げ捨てたことは、暴力的解決はしないという象徴である。だからこそ陽菜は帆高に近づき、自らの秘密、彼女が「晴れ女」であることを教え、親しくなったのだろう。

ここで陽菜が「来月で 18 歳」と偽ったことが興味深い。彼女はまだ未成年だが、もう少しで成人になれるということ（もう少しで東京都青少年の健全な育成に関する条例の対象から外れること）、帆高より年上に振る舞いたいという思い、そして家出して身寄りのない帆高をかくまいたいという色々な思いが陽菜にはあった様に感じられる。（そしてお互いに対等になるには未熟なのだろう。）そしてなにより、帆高と対等な存在になろうとしなかったのだろう。それはとりもなおさず帆高に対して恋愛感情を抱くことを恐れていたようにも感じられる。そして帆高と陽菜は互いが希望の光（「ハレ」）の存在へとなって

いく。

これから陽菜が晴れ女として、帆高と陽菜は晴れビジネスを展開していく。

４）陽菜の社会的役割の獲得と自己犠牲と「ハレ」

帆高と陽菜が知り合い、お互い社会に溶け込めないで、同じ境遇の存在を知った喜びは互いにこの上なく、夢のようなものであったであろう。そこで帆高と日向は関係性を深めていくのではなく、昇華するかのように晴れビジネスを展開していく。そのビジネスは評判を呼び、瞬く間に広がり、メディアでも注目されるようになっていく。それは雨の日が続く束の間の「ハレ」の空間である。神宮外苑花火大会の日に陽菜が言ったセリフが象徴的である。

陽菜：この仕事。晴れ女の仕事。私ね、自分の役割みたいなものが、やっと分かった――――ような気が、しなくも、なくもなくも、なくもなくもなくもない

この発言から陽菜はこのビジネスを通して自分が社会的役割を持ち始め、充実感を感じ始めている一方で、それでいいのか？という不安が混在した思いを語っているように感じられる。

しかしこの晴れビジネスは場当たり的な発想であり、二人の置かれた困難な状況から目をそらすかのようである。一種の現実逃避であり、お互いが抱いてきた孤独感や不安感を否認する躁的防衛のような状況になっているように感じられる。

そして陽菜に関して晴れビジネスで瀧くんの祖母冨美さんの家に訪れたシーンで

冨美：旦那の初盆くらいは、晴れにしてやりたいと思ってね
と言ったのちに
陽菜：じゃあ、うちのお母さんも初盆なんだ……

といった言葉があまりにも人ごとのようにあっさりと会話が終始していたのが印象的であった。もちろん彼女らしくまわりを気遣い、心配させないようにそのように振る舞ったとは思えるが、母の死に対してある種の否認が働いているようにも感じられる。
以下のボウルビィのいう心理過程に沿って考えるならば、

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】
①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）
②思慕と探求・怒りと否認の段階
（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）
③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）
④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

①もしくは②の状況のように感じられ、陽菜は母の喪失が受け入れられず、母が生前の頃の生活を今も続けていこうとしているように感じられる。そしてそこで生じる葛藤を無かったことのようにしているように感じられる。冨美さんは

冨美：あの煙に乗って、あの人は向こう岸から帰ってくるんだよ。お彼岸。空の上は昔から別の世界さ

と言っているが、空の上を向こう岸（あの世）と考えることで、陽菜の母にまつわる情緒的葛藤を向こう岸へと排除させ、彼女自身の心を安定させようと考えていたのかもしれない。
　次のシーンで神社の神主が夏美と圭介に龍の天井画を解説しながら天気の巫女について次のように言及している。

神主：天と人とを結ぶ細ぉーい糸がある。それが天気の巫女だ。人の切なる願いを受け止め、空に届けることのできる特別な人間。

晴れ女である陽菜は、まさに巫女のような存在だったと言えるだろう。
　以前、番組で『君の名は。』を取り上げた際、主人公の三葉は高校生でありながら宮水神社の巫女を務めているという設定に着目した。巫女とは、神を祀り、神に仕え、神意を世俗の人々に伝える役割を担い、村の人々と神との間を繋ぐ存在、つまり村のアイデンティティの象徴である。吉本隆明は、巫女を「村の共同幻想と融合している」存在と捉えていた。（ちなみにアイドル達はファン達の共同幻想と融合しているように感じられ、アイドルはある種現代の巫女的側面があるのではないだろうか？）
　一方で、三葉は一般的な高校生としての自我も持ち合わせており、巫女であることに違和感を覚え始める。この葛藤を乗り越えられずに、彼女は暮らす糸守町とともに、自身の

自我をも失ってしまう。これは、自分の存在意義を晴れ女であることにのみ見出している陽菜にも当てはまる。

陽菜が晴れ女であり続けることは、三葉と同様に、彼女の自我の消滅を招きかねない。この状況を変えるためには、『君の名は。』の瀧のように、陽菜の葛藤を受け止め、彼女を救い出す存在が必要となる。それが帆高なのである。

５）凪の提案と「ハレ」

しかし帆高は陽菜に対して煮え切らない態度をとり続けている。それで陽菜の弟の凪に帆高は相談するが、その態度に業を煮やした凪との会話シーンを取り上げる。

凪：――指輪だね。間違いない
帆高：え、マジ、いきなり指輪!?　え、それって重くない？
凪：誕生日プレゼントだろ、姉ちゃんの？
帆高：うん。他の女の人にもリサーチしたんだけどさ――。一ミリも役に立たなくてさ。……でもそうかー、指輪かあ……うーん…… 。
凪：――帆高さあ、姉ちゃんが好きなんだろ？
帆高：え？……―えええええっ!?　　いやいやいや、別に好きとかじゃなくて……え？いや俺もしかしてそうなのか？　え、いやいやいやいつから？　もしかして最初から？えええええ!?
凪：あのなあ、はっきりしない男が一番ダメなんだよ
帆高：え、そ、そうなの？
凪：付き合う前はなんでもはっきり言って、付き合った後は曖昧にいくのが基本だろ？
帆高：凪センパイって呼んでいいすか？
凪：――母さんが死んでから、姉ちゃんずっとバイトばっかでさ。それはきっと、俺のためなんだ。俺まだガキだからさ
帆高：……
凪：だから姉ちゃんには、もっと青春っぽいことしてほしいんだよね。……ま、帆高でいいのかは分かんないけどさ

【考察】

帆高の煮え切らない態度に凪は単刀直入にアドバイスを送っている。凪自身にとって帆

高はよそ者であり、当初は警戒心や不信感を抱いていたように感じられる。しかし晴れビジネスを一緒にするなかで、陽菜、帆高、凪の３人の関係が非常に活気あふれたものになり、信頼関係が生まれ、この関係性が続いていて欲しいと凪は感じたと思われる。(陽菜も晴れ女の仕事に自分の役割を感じたと話していたが、もしかしたら、この三者の関係性に居心地の良さを感じたのからこそ、その発言をしたのかもしれない。）だからこそ凪は帆高と陽菜が付き合って欲しいと感じたからこそ、このアドヴァイスを送ったように感じられる。そし帆高の陽菜のプレゼントに対して凪は即座に「指輪」と答えたが、「指輪」は一般的に永遠の絆、約束の象徴である（一方で帆高が「重くない？」と言ったように指輪は束縛の意味合いもある。そして帆高自身も責任を持つことの怖さがあるようにも感じられる。)。だからこそのこの関係が長く続いて欲しいという思い、そして「姉ちゃんには、もっと青春っぽいことしてほしい」と語っていたように、この関係性を続けながらも陽菜が自我を持ちイキイキとした生活を送って欲しいという思いを帆高に伝えているように感じられる。

その後、帆高が陽菜にプレゼントをあげようとしたときに陽菜の秘密が語られる。そこで陽菜は言う。

「あの時から、私は空と繋がっちゃったんだと思う」(以下補足的に)

この発言は深い心理的意味を含んでいると考えられる。

ウィニコットは躁的防衛の特徴の一つとして、「内なる現実の人々を"生きたまま仮死状態"にしておくこと」を挙げている。陽菜の発言はまさにこの状態を象徴している。晴れ女として万能的な存在となった陽菜だが、実際には母の喪失を受け入れられず、彼女の内的世界において良い母（良い対象）と悪い母（悪い対象）の両方を保持したまま、それらを万能的に支配するという躁的防衛の状態に陥っていたと考えられる。

この万能的支配により、確かに悪い母を制御することは可能となるが、同時に良好な関係性もすべて停止されてしまう。その結果、陽菜自身の内面が死滅してしまうことになり、これは前述の通り自我の消滅を意味するものである。

6）刑事たちの追求と「ケ」

　その後、陽菜の家に刑事と女性警官が訪れ、帆高がいないかと事情聴取される。そしてここに保護者がおらず、子ども達だけで生活しているのは問題だと指摘され、後日児童相談所の介入が入ることとなり、これまでの生活が大人達によって壊されることになってしまう。警官は父の象徴であり、超自我対象である。ある意味、彼らは帆高達にこれまでの

夢の出来事から別れを告げ、現実と向き合えと言っているように感じられる。
　しかし帆高達３人は逃避行をすることにする。それはまさにキャッチャー・イン・ザ・ライの主人公ホールデン・コールフィールドの逃避行のようである。途中夏にも関わらず、大雪が降り、交通機関が大きく乱れ、警察に補導されかけるも命からがら逃げ出し、どうにか場末のラブホテルに泊まることができた。そこで３人はカラオケに興じたり、枕投げをしたりと束の間の楽しい時間を過ごす。
　そのなかで帆高は思う。
――もしも神さまがいるならば、
お願いです。もう十分です。もう大丈夫です。僕たちは、なんとかやっていけます。
だから、これ以上僕たちになにも足さず、僕たちからなにも引かないでください。
神様、どうか、どうか。僕たちを、もうすこしだけこのままでいさせてください。

そのように帆高が祈るということは、このひとときは長くは続かないということに気がついているのだろう。
　その後、0時を過ぎて、陽菜の誕生日になった時に陽菜と帆高で取り交わされた会話を取り上げる。

帆高：陽菜さん、十八歳のお誕生日、おめでとう。安物だけど、陽菜さんに似合いそうなのを探したんだ
陽菜：ありがとう……！　ねえ、帆高はさ、この雨が止んでほしいって思う？
帆高：え？ ――うん
陽菜：人柱なんだって、私
帆高：……え？
陽菜：夏美さんが教えてくれたの。晴れ女の運命。晴れ女が犠牲になってこの世から消えることで、狂った天気は元に戻るんだって
帆高：え……まさか……いや、あの人たちの話っていつもすげえ適当だし……まさかそんな……消える？　そんなわけ――

陽菜がバスローブを抜いていくと彼女は半身は透明になっていた。

陽菜：……帆高。どこ見てんのよ？
帆高：どこも見て――！――陽菜さんを見てる……

帆高は泣きそうになりながら言う。
陽菜：……どうして君が泣くかな……。最初はなんともなかったの。でもある時気づいたの。晴れを願うほどね、体が透明になってくの。…このまま私が死んじゃったらさ……きっと、いつもの夏が戻ってくるよ。凪をよろしくね。
帆高：イヤだ！！だめだよ、陽菜さんはいなくならない！　僕たちは三人で暮らすんだ！
陽菜：帆高……。
帆高：陽菜さん、約束しようよ。俺が働くから！　ちゃんと生活できるくらい、しっかり稼ぐから！　もう晴れ女をやめたんだから、体だってすぐに元に戻るよ！

泣き出す帆高を陽菜は抱きしめ、お互い強く抱きしめ合う。

【考察】
　このやりとりから陽菜は、晴れを願うほど体が透明になっていく異変に気がつき、天気の巫女は人柱になるという言い伝えを受け入れ、覚悟し、人々の願い（巫女が生贄となり晴れるという共同幻想）に融合する形で、自分自身が消失していく（いわば自我の消失）ことを受け入れようとしているように感じられる。一方で帆高はそのことを自分のことのように嘆き悲しみ、なんとかこの状況を避けようと必死にもがいている。その二人の様子が対照的である。陽菜は何か悟っているかのようであるが、帆高は嘆き悲しみ、必死にどうにかしようともがいている。しかしこの帆高の思いも陽菜も思いであり、帆高の思いは陽菜自身の受け入れられない（彼女の悟りの裏側にある悲しみ）感情の投影のように感じられる。
　それだからなのかもしれないが、帆高自身の心の成長が感じられる。この会話の中で帆高は陽菜という存在が自分にとってかけがえのない存在であり、一緒に生活を築き上げていこうという強い主体性を感じる。

　そしてその後、帆高と陽菜が見た夢が非常に意義深い。帆高は夢の中で「この場所から出たくて、あの光に入りたくて」と言っていたように、帆高は、エディプス葛藤に押しつぶされ、今ある状況から逃げ出し、大人のように自立した生活を望むが、孤独や不安を抱え、主体的になれないでいた。そこで陽菜に出会い、愛すべき対象を見出し始めたが、夢が途中で終わってしまったといいうことは、それはまだ道半ばということを意味しているのだろう。

陽菜は帆高に出会った頃からのことを回想した夢を見たが、風俗バイトに手を染めようとしたときに、そこから救い出してもらい、帆高に対し、「生きる意味を見つけてくれた」と言い、小説版では「君に会えて、本当に幸せだった。もし君に会えていなかったとしたら、私は今ほど、私自身も世界も愛せていなかった。」というように、陽菜にとって、帆高は生きる希望であり、心の支えだった。しかし陽菜は消えて、空の上に行ってしまう。そして空の上の世界に行った陽菜は帆高にもう会えなくなるかもしれないと考え、嘆き悲しんでしまう。

ここから帆高が陽菜を助け出す話へと展開していくが、ここが『君の名は。』で三葉の住む糸守町が隕石の落下で消滅し、そのことを知った瀧が、三葉を救い出すために宮水神社の御神体へと一人で向かう展開と似ているものを感じる。

その後、刑事がそのホテルに乗り込み凪は児童相談所に帆高は警察署に送られることになる。しかし帆高は警察署から逃げ出し、逃走劇を繰り広げていく。

Ⅲ．警察官とエディプスコンプレックス

１）警察の保護　そして　逃走の意味

警察は父親の象徴の側面があり、超自我を表しているように見える。そして『天気の子』における警察の保護は、帆高自身がまだ大人になりきれておらず、未熟な存在であり、無力感を象徴しており、現実から目を背け必死に逃げようとする帆高に対して、警官たちは目覚めて向き合えと言っているようにも感じられる。それと警察の保護は同時に思春期におけるさまざまな喪失への無理解への怒りを象徴しているように感じられる。

帆高にとって陽菜がいなくなるということは希望の光が失われたことを意味する。そしてそれはある意味、現実に立ち向かうための移行対象を失ってしまったことでもある。大人たちは、その喪失を全く理解できていない。それはライナスにとって唯一無二の大事な毛布が、ボロボロの汚らしい毛布としか思えないのと同じである。

だから必死に陽菜の姿を追い求める理由のわからない警察達は、自分達のルールをことごとく壊し、逃げていく帆高にただ怒りを感じ、彼らは自分の職務をすることに命をかけ、帆高を必死に捕まえようとする。そこに帆高と大人達、言うなれば子供と大人の心の断絶が生じているのである。

帆高が警官との逃走劇を繰り広げている時に夏美に遭遇するが、夏美は帆高の思いに共感し、帆高の逃走劇の助太刀をする。それは彼女がまだ、大人になりきれておらず、子供の心を持ち続けているからであろう。そうして帆高は警察の追手から逃れて陽菜が晴れ女になったという代々木の廃ビルへと向かっていく。そしてそこに辿り着いたときに待っていたのが須賀圭介である。

２）須賀圭介と対峙すること

ようやく辿り着いた帆高だが、そこに待ち構えていたのは、これまで東京での生活を援助してくれた須賀圭介であった。しかし須賀は帆高の思いを理解する子供側の立場ではなく、警察と同様に大人の立場で帆高に接していた。そこで帆高は須賀と対峙することになる。それは、これまで父親をはじめ、様々な大人達に抱いていた彼のエディプス葛藤の再演である。

須賀：帆高 ！
帆高：須賀さん?
須賀：探したぜ、帆高
帆高：え…どうして…。
須賀：お前、自分がなにやってるか分かってんのか?
怒った口調で言う須賀。帆高は怒鳴り返して言う
帆高：陽菜さんが消えたんです ！
須賀：――――――！
帆高：俺のせいなんです、俺が晴れ女なんてやらせたから
須賀：帆高、お前――。
帆高：今度は俺が助けないと……!
パトカーのサイレンが会話に割り込む。
帆高：行かなきゃ!
須賀：おい待てよ!（須賀が帆高の腕を掘む。）お前どこに!?
帆高：あそこから彼岸（ひがん）に行ける!
帆高は部屋の天 井を指す。崩れてぽっかりと抜けた天井越しに、朱い鳥居が見えている。
須賀：お前、なに言って…
帆高：空にいるはずなんです！非常階段を伝ってあそこまで行けば！

帆高は前に出ようとするが、強く腕を引 かれる。
須賀：帆 高 ！
帆高：助けなきゃ！
須賀：待てよ、空になんているわけねぇだろ?
僕の腕を掴んだ須賀さんの力が強くなる。
帆高：離せ!
須賀：しっかりしろ！！！

帆高は須賀にビンタされる
須賀：とにかく落ち着けよ、帆高。今すぐ警察に戻った方がいい。話せば分かってもらえるさ、お前は別に悪くねえんだから
腕を掴み、懇願するような口調で言う。
須賀：このまま逃げ続けたら、もう取り返しがつかなくなる?そのくらい分かるだろう?

（帆高の思い）この人がなにを言っているのか、僕には本気で分からなくなる。逃げる?逃げているのはどっちだ?見ないふりを しているのは誰だ?

須賀：(優しい口調で）心配すんなよ。俺も一緒に行ってやるからさ。二人で事情を話そうぜ、な?
そう言いながら、強引に帆高を出口に引っぱっていく。
帆高：離 して! 離してください!
須賀：落ちつけって言ってんだろ!
帆高：離せよっ!

帆高は思いきり、須賀の腕に噛みつく。
須賀：痛ー ッ! てめえ!
帆高は腹を蹴られる。背中から壁にぶつかり、床に倒 れ込む。
帆高：うぐ…!
目を開いたその場所に、拳銃があった。
以前、帆高が捨てた銃だ。彼はとっさにそれを掴み、銃口を須賀に向ける。
帆高：邪魔するなっ ！
須賀は目を見開く。

須賀：帆高…? お前、そんなもん持って――。
帆高：陽菜さんのところに（帆高は目をつむる。）行かせてくれよ！！
ドンー！
重い発砲音が廃ビルに木霊する。天井にむけて帆高は銃の引き金を引いていた――。

【考察】

先ほども示したように須賀は今までのような帆高の立場を理解する存在ではなく、大人の立場の視点で帆高に接している。しかし帆高の考えを子供っぽい幻想と切り捨て、現実を見据えるようと諭す言葉は、まるで須賀自身に言い聞かせているようにも聞こえる。須賀にとっての現実は、妻の死という喪失が受け入れられず、娘にも会えない、いわば前に進めない諦めの生活である。一方で、須賀と帆高の共同生活で育まれた絆があるからこそ、帆高の強い意志に心揺さぶられる部分もある。しかし、その思いを必死に打ち消し、警察に自首させようとする。それは、帆高の無謀な行動を止めるためであり、同時に、自分自身の未熟さを克服できなかったという悔恨の表れとも考えられる。しかし帆高はそれに決して屈せず、殴られても怯まず、銃の引き金を引いてまで自分の意志を突き通そうとする。

それは以前のチンピラの様な金髪の男性に陽菜がホテルに連れ込まれそうになったシーンで、彼が馬乗りになり、帆高は殴打されてしまうが、陽菜を助けようと拳銃を発砲する出来事と反復する。

帆高はこれまで、エディプス葛藤に囚われ、逃げるように生きてきたと考えられる。しかし今、帆高は、本気で人を愛し、愛する人を守り、社会の一員として生きていこうとする青年へと成長したように感じられる。

帆高の強い意志は、最終的に須賀をも突き動かしたと考えられる。リーゼントの刑事に帆高が連行されそうになったとき、須賀は怒りを露わにし、刑事を突き飛ばし、帆高が陽菜を助け出そうとすることに手助けする。これは、帆高の決意に須賀が心を打たれが故に無意識のうちに手を貸したのではないだろうか。

３）陽菜を助け出すということ

このシーンで帆高が鳥居をくぐるシーンは「君の名は。」のある主人公の瀧が起こしたあるシーンを思い出す。
それは、三葉が暮らしていた糸守町が隕石の衝突で消滅してしまったことにショックが受けた瀧は三葉になった時の記憶の糸を辿り、宮水の御神体が奉られている「彼の地」に向

かい、川を渡り、洞穴の中に入り、口神酒を飲み、夢をみる、そのシーンである。川を渡る前に瀧が「ここから先はあの世」と言った様に、瀧は三葉を生き返らせるために三途の川を渡り、黄泉の国に向かう思いで洞穴に向かったと以前このアニメをこの番組で取り上げたときに考察している。帆高は鳥居を指して「あそこから彼岸（ひがん）に行ける!」と言ったが、瀧と同じように帆高も黄泉の国にむかう思いで天に登り、陽菜を助け出そうとしたのだと考えられる。小説版でも新海誠は次のように述べている「雲の上のこの草原は、彼岸だ。僕らがいてはいけない世界だ。ここは死者の世界だ。」

　そして帆高は天に昇り、陽菜を助けにいく

帆高：陽菜！
陽菜：帆高！
帆高：――陽菜、飛べ！
帆高：陽菜、会えた！ほんとうに会えた！
陽菜：帆高、帆高、帆高！
帆高：手を離さないで！
陽菜：うん！
帆高：陽菜、一緒に帰ろう！
陽菜：でも、私が戻ったら、また天気が―――!
帆高：(怒鳴った口調で）もう いい！!
帆高は怒鳴る。陽菜が驚いた顔をする。
帆高：もういいよ! 陽菜はもう、晴れ女なんかじゃない!

見開いた陽菜の瞳に、激く稲 妻が明滅する。雷鳴に振動する雲間を抜け、僕たちは積乱雲の下をまっすぐに落ちていく。

帆高：もう二度と晴 れなくたっていい！
陽菜：青空よりも、 俺は陽菜がいい!
帆高：天気なんて――狂ったままでいいんだ！

帆高：――自分のために願って、陽菜
陽菜：……うん！

【考察】

このシーンは帆高が天に昇って陽菜を助け出す場面だが、これまでの帆高とは異なり、強い意志を持った一人の青年として陽菜と向き合っている。ここでは帆高と陽菜の関係性に明確な変化が見られる。それまでは帆高が陽菜に守られ、導かれる立場であったが、このシーンでは逆に帆高が陽菜を導こうとしている。この変化は、警察に保護された帆高がパトカーの中で陽菜の実年齢が 15 歳、つまり自分より年下だと知る場面の伏線回収にもなっている。新海誠監督は意図的に、帆高の精神的成長と陽菜の年齢の明示のタイミングを関連付けて描いたと考えられる。

小説版において、新海誠は帆高のセリフとして「僕は決めている。他のことなんてどうだっていい。神さまにだって僕は逆らう。言うべきことはもう分かっている」という言葉を記している。これは天気の巫女が人柱となるという言い伝えへの反逆を示すものであり、帆高がこれまで従順に守ってきた価値観を打ち破る瞬間、すなわちエディプスコンプレックスとの対峙を表している。

帆高は陽菜への愛を通じて、既存の価値観を超え、新たな信念と主体性を獲得し、それを陽菜にも伝えようとしている。消滅の危機に瀕した陽菜に主体性を取り戻させ、救出しようとする帆高の行動は、『君の名は。』において瀧が口神酒を飲んで三葉と入れ替わり、糸守町の人々と三葉を救うために隕石落下当日に電波ジャックや変電所爆破を計画したことと通底している。

しかしここで一つ疑問点がある。それは現実からいなくなり、彼岸に行った陽菜を帆高が救い出すということは、喪失の否認であり、いわゆる躁的防衛なのではないだろうか？そこでエヴァンゲリヲン 新劇場版：破（以下エヴァ破と略す）の最終場面と比較して考えてみたい。エヴァ破ではアスカが使徒に変わってしまったという喪失、そして綾波も使徒に飲み込まれるという耐え難い喪失の感情にシンジの心が受け止めきれず、妄想分裂ポジションの自己愛的世界に陥り、対象の喪失を完全に否認し、万能的な充足や歓喜の幻想にひたる躁的な心になっているように感じられる（躁的防衛)。上記のようにエヴァ破を扱った際に述べたと思う。そして天気の子における帆高の行動も、確かにエヴァ破のシンジのように躁的な心に突き動かされている。しかしエヴァ破との大きな違いは、帆高は陽菜が社会の人柱のような役回りで消滅していく生き方から救い出し、陽菜を生き返らせることで、彼女が社会の中で主体的に立ち振る舞っていくことを促している。そこには帆高のエディプスコンプレックスを乗り越え、社会で強く生きていこうという決意も感じられる。

Ⅳ．エピローグ

　その後、帆高は警察に逮捕され、保護観察処分となり、地元に戻り、再び以前のような高校生活に戻った。高校卒業後、帆高は大学進学を機に再び東京に戻る。そして陽菜に会いにいく。

　彼女が、そこにいた。坂の上で、傘も差さず、両手を組んでいた。目をつむったまま、祈っていた。降りしきる雨の中で、陽菜さんは沈んだ街に向かい、なにかを祈っていた。そのとき帆高は強く感じる。
違う、やっぱり違う。あのとき僕は、僕たちは、確かに世界を変えたんだ。僕は選んだんだ。あの人を、この世界を、ここで生きていくことを。

そして最後に帆高は陽菜に向かっていう。「僕たちは大丈夫だ」

【考察】
　2 年半前に初めて帆高が上京して、色々起こした出来事は、島に戻ってから何事もなかったかのような平穏な日々が続き、その出来事そのものも、忘却の彼方へと消えていきそうであった。
　また、帆高は陽菜を救うために「晴れの世界」から彼女を連れ戻し、その結果として東京は永続的な雨の状態になる。多くの人々の生活を犠牲にして、陽菜を選んだと帆高は感じており、帆高はそのことで罪責的な思いを持ち続けていたと感じられる。
　「世界は元々狂っていた」という言葉を須賀や冨美から声をかけられるが、その言葉にある気づきがあったが、その言葉を全て受けれられないでいるようにも感じられる。なぜなら彼らの言葉は大人たちがよくいう「仕方がなかったんだよ」という諦観の念のようにも感じられ、それでは帆高が 2 年半前に起こした行動の意味を見出せないからである。あの行動は無意味であったのではないかと感じる一方で、陽菜をはじめとした人々と出会い、イキイキと交流し、主体的に行動したことで世界を動かしたと感じていたとも感じている。それが今の帆高のアイデンティティとなり、それであるが故に、高校卒業後、もう一度上京し、陽菜と再会しようとしていたのではないだろうか。
　そして最後のシーンで、陽菜が雨の中で祈っている姿を見たとき、帆高は彼らの選択が単に「世界を犠牲にして愛する人を救った」ということだけではなく、もっと深い意味を

持っていることに気づいたと考える。

映画の前半では、帆高も陽菜も社会の周縁に位置する、いわば「保護されるべき」未成熟な存在であった。帆高は家出少年であり、陽菜は自分の体を犠牲にして他者のために働く「晴れ女」であった。

しかし陽菜はもはや「晴れ女」として雨を止める必要はなく、雨の中でも自分自身として存在できる。そして、陽菜は「天気」と向き合い、未来を生きていく、彼女の祈りはそんな意味を込めていると帆高は感じたのではないだろうか。つまり、彼らは文字通り「世界を変えた」のである - 物理的な気象条件だけでなく、自分たちの生き方、世界との関わり方を根本的に変えたということを帆高は痛感したのである。

だからこそ祈る陽菜の姿をみて帆高は「僕たちは大丈夫だ」と言ったと考えられる。「僕たちは、大丈夫だ」という帆高の最後の言葉は、まさに二人の精神的成熟と自立を象徴していると考えられる。彼らはエディプスコンプレックスに向き合い、メラニー・クラインの理論に沿って考えると、彼らは抑うつポジションを経験することで、自分たちの選択がもたらした結果（永続的な雨）に対する責任を引き受け、それと共に生きていく覚悟を固めたと考えられる。